

春雷

金石

稔

きょう海の鼓動ははじまる
一匹の蜂がそのなかに巣くう

寄せかえす陽にあらがい
子守唄に虹はかかる

青空の底からのびあがる冬の河
歯ぎしりのまわりの千年
森に点めつする無数の木々

もりあがる心臓のなかを
しま

春が通る
微笑と落雷とを連れて

回想にそっとそえられた手の
影ふるえ

夜のように
ふるえるひとたびの人々

耳そばだてて

けれども動こうともしない三月

青空

おおらかな羽ばたき、青空よ、刻々と夜にしみ入るお
まえの喉のうごめきが、あすも、あるとすれば、七色に
仕上げられて、群れいる緑の麦穂と月の黄金。まばたき
のかけから駆けよる馬と雲のように、円形の鐘を持った
枯木の根、さても世界の失恋のすべてが、化石の葉紋に
こめられたらしい。夢みる赤い屋根のサイロやせりあが
る坂の、あわいに生まれる海のしずくの奥にも、へめぐ
る半島、朽腐船いっせう、二つの大洋、防波の冥想があ
ると。いま次なる世紀の交配におののく指話の人々が、
群鹿のようにはじらう。ここでも、午後の眠りが、ある
とすれば、大地の平和にほかならず、放り上げられた幾

晩ものささやきの角度は、四季、おりおりの遠洋へへと
は、煙たつ食事と盆栽喬木をつちかた塩にくりかえ
し、おちこむ。岩壁の想い出や陽の子孫たちまでが、ど
うやら、柔らかな未来へと引きずりこまれている。花々
しい水平線に、これらは吊り下がっていた。

九月

たびびとよ

あなたは岸辺を行け

自からに掘り下げられ眼よ

二つの天のように

おしよせる海牛の

デッサンを抱いて

しま一つ

失われた形と皮膚の色彩について

みちたりた言葉をそえる

天然の風のなかに

老衰やあくびに似た

透明な白布の
りねりが残った

ひとたびのひとびと
永遠の砂時計の下に
のびのびとして
木立の影は伏せる

知らない

銃声と耳のなかに
不滅の海があるとは

あなたの指は
もう

あわだつ

貝がらよりも
深みを指させる

河口には

音のないぼくの胸が

あるばかりだ

献身

薄明をついて遠来の客、潮風、一少女の鼻息。真上に小鳩の乱舞。翼にそって生ぐさいフリルと新たな空気のもりあがり。夢ゆるやかに運河は急ぐ。海峽につながる木肌のあらわな小橋、ぼろをまとった点景の少年たち、彼らの古い術、白昼の声はまだ姿をみせない。遠くで恋という窓は開かれ、投身者の幻、走り去り走り来る無人の帆船、海一滴による呼吸、みいられた冬の冷靜。街並は目覚め、無数の寓話をもたらし、火のないひとつの飾台をめぐる。水色のリボンやらシンドバットの森、冒険にみちあふれた屋敷とともに。醜の外では、憤怒の天使が愛惜のむくろをねつかせ、また前世紀へと連る坂道の向こう、古い厩舎にある限り、牧草の芽をめぶかせる。

卓上時計のひびき、一連の海女たち、かまでられる農夫らの収獲の拍手が四季が、これら一切の晩秋、落日を待つ唇。天おおう懊悩の雷雲、黒、渦巻、と思えばさみだれてくる俺の愚劣な野辺の午睡、そして足跡が残るま

まの宮庭、つる草、矢窓。談笑する古装束の影たちと喊声、唯一の墓地に似ている嵐は、もう去ったのか。彼らの皮膚と箴言は……。古色定まらぬ醜陋者たち。鉞石。地の百合を踏みしだいていく顔、ソリかえる手首と血もよりの剣。灼熱と砂だ、あいもかわらず夜がうすまわく流城、天使のゆあみには、鉄の爪とステンレスの眼だ。はしけに降りつみ、静かな、肉体の点めつと誇り。隈限のない音楽、愛情とつつましい太陽の仕草と墓碑、枯れ落ちたままの齧^{カミ}やがて雑多にきらめく酒宴の暮色。また、肌と雪原のあけぼの。静けさと動き、これらすべての花びらと城、自然と凋落、昔ながらの追憶と情とに、二股かけた冥想なら、慈愛の互網とさけぬに見込まれもしよう。だが、あられもない大平原の裸族の塵墟だ。冬の頭にはほろけて、野卑な抱擁、永遠の群落。草食動物の夜営^{ヤウ}と小舟^{カヌー}の旋回、戦だ、瞬間の微熱のうちへと旅立つ、それこそが、未知か。夢ばかり戻る老いと花環。天眞。小波をまね、春雷をまね、性格をきたえる。眼に映る女たちのステップを、きめこまやかな数学を？もう消えた。ぼくのなかの、不滅の搏動と、

掘り出された驚愕とは……。